

保育者の専門性を高める実践研究とは？ —保育者が“無理なく”“楽しく”“継続的な”研究を進めるために—

What is Important for Practice Research to which Early Childhood Teachers Improves their Professionalism?

—Searching for the Reasonable, Pleasant and Continuous Way of Research.—

概要

本稿は、平成24年3月10日に幼研教育研究施設が企画・主催し、広島県私立幼稚園連盟と広島大学附属幼稚園の共催によって行われた幼児教育シンポジウムの抄録である。本シンポジウムは、平成24年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト推進経費の助成を受け、幼年教育研究施設が行った「保育者の自発的な専門性向上のための大学研究者の役割」の一環として執り行われたものである。登壇者は、次のとおりである。

- 司会者：七木田 敦（広島大学大学院）
- 話題提供者：金岡 美幸（広島大学附属幼稚園）
水原 紫乃（焼山こぼと幼稚園）
中坪 史典（広島大学大学院）
- 指定討論者：無藤 隆（白梅学園大学）

企画趣旨

明日の保育をより良くするためには、子どもたちの声に耳を傾け、同僚の言葉にヒントを得て、学び続けることが大切である。しかしながら、保育者は実践研究に対して、「敷居が高い」「研究は苦手」「お勉強が大変」など、ネガティブなイメージを有していることも指摘されている。本シンポジウムでは、日々の営みに根ざした実践研究、子どもの行為や言葉を物語る実践研究など、保育の質を高めるための実践研究のあり方について検討する。

【話題提供1】

実践研究の苦悩と楽しさについて

話題提供者：金岡美幸（広島大学附属幼稚園）

1. 現場での研究とは？

私の研究のスタートは、大学卒業後1年目に

勤務した幼稚園で、園長から「研究紀要に書くための課題を与えられて、原稿に書くこと」であった。ところが、現場に出たばかりで子どもの様子もわからず、子どもの姿が全く見えていない内容であったため、原稿は採用されなかったほろ苦い思い出がある。

それから8年後、研究を一つの使命とする広島大学附属三原幼稚園に異勤し、より研究にかかわるようになって、今に至っている。保育活動をしながらも、研究をするということ、つまり、実践だけでなく教材研究や教材準備、会議、資料作りなど、ありとあらゆる雑多な業務がある中、研究にかかわる作業を行うことは、物理的にも精神的にも並大抵の苦勞ではない。そうした「苦しさ」が「楽しさ」へと変わったのは、研究の成果が子どもへ還ることを理解してからである。

その大きなきっかけとなったのが、幼小中一貫教育の研究として、文科省の研究開発指定を受け、小中の先生方とプロジェクト型の縦割りの研究グループがいくつか作られた時であった。その時、プロジェクト型アプローチに出会ったのである。はじめは、言葉の意味や想定されているものへの理解はできたのだが、具体的に着手するにあたっては、通常の研究と何が違うのかさっぱりわからなかったため、やっではみるものの、なかなかプロジェクト型アプローチにならず、暗中模索が続いた。

そうやって、仲間と試行錯誤を重ねるうちに、トップダウンではなくメンバー皆で自由にのびのびと行える研究であることを実感し、研究に対する考えが大きく変わった。メーリングリストを作ったり、自分で好きな研究者へ質問したり、自分たちが課題であると思っていることを深く追求することができる、それがなんとも面白いことを実感した時に、研究が楽しくなった。

また、研究主任として研究推進をした時には、小学校や中学校の研究主任から示される幼児教育の範疇を超えた見解や推進方法との出逢いを体験し、研究の新たな楽しさを感じた。

2. ままならない現実への心構え

そうはいつでも、苦しいのが研究である。意気揚々と始めたものの、いくつもの課題が目の前に立ちほだかり、一筋の光が見えても、次はまたどうしようかと考えあぐねることの連続である。研究を追いかければ追いかけるほど葛藤するなかで、決して忘れてはいけないのが、保育者としての本質ではないだろうか。つまり、私たちは「子どもを育てているプロ」であるという自覚と責任であろう。具体的に言えば、「子どもひとりひとりの成長に真摯に向き合うことができているか」、「どんなにささやかでも、子どもの成長に喜びを感じる自分の自分であるだろうか」、「子どもの変容に鋭く気づきながらも、おおらかに成長を待てる自分であるだろうか」という点である。

このような保育者の本質を忘れずに、煩雑な現場で研究を推進するためには、様々な知恵を求めることが必要である。それは、研究指導者や先輩からの助言であり、先行研究や専門書を読むことであり、日常の保育のなかに転がっているヒントに気づく心の眼であり、子どもたちひとりひとりからの発信である。

では、数々の苦労を経ながら、課題を見つけ、実践し、一連の結果を整理し、まとめあげる実践研究活動から得られる成果とは、一体何であろうか。それは、自分の力で得た自分だけの宝物である。まとめあげた成果は、自分の専門性を高め、積みあがった豊かな専門性はプロとしての力量を高める。保育者としての力量アップは、子どもたちや保護者から信頼を得ることへとつながる。保育のプロとして子どもたちや保護者から得られる信頼は、保育者としての喜びであり、かけがえのない宝物である。

私たちは、研究のための研究をしているのではない。子どものより良き成長を求めて研究しているのである。方法を学び、発想を変え、仲間と支え合いながら、柔らかい心で子どもと接し、プロとしての責任を持ち、保育活動での新たな発見を求め続ける、魅力的な人間であろうではないか。

【話題提供2】

「なぜ、幼稚園の先生が研究しないと
いけないのか？」

話題提供者：水原紫乃（焼山こぼと幼稚園）

1. 私立幼稚園連盟と広島大学附属幼儿教育研究施設の連携実践研究事業のはじまり

全国47都道府県の私立幼稚園団体によって構成される私立幼稚園連盟のひとつである、広島県私立幼稚園連盟には、およそ200園の私立幼稚園が加盟している。ここで行われる実践研究事業とは、従来、私立幼稚園連盟本部で決定したいくつかの研究テーマのなかから広島県私立幼稚園連盟の役員が選択し、指導助言者や実践研究事業を行う園を取り決め、依頼を受けた園の保育者がその研究テーマに沿って研究を進めるという形式であった。

ところが、このトップダウン的な実践研究事業では、研究を行った保育者が、研究の意味も解らずに受身的な状況で、義務感のもとに進めている状況であったため、成果発表後も自分でやったという実感がわかず、「誰のための何のための研究であるのか？」という思いがくすぶるものとなっていた。

そのような状況を打破するために思案する一方、ドイツやイタリアのレッジョ・エミリアの幼児教育に触れたのだが、有名な海外の幼児教育実践と比べても、日本の幼稚園はよりよい環境を整えるための試行錯誤を行っており、実践の質も高いのではないかという自負があった。ところが、日本の幼稚園での保育実践の素晴らしさ、園外に向けて提示する手段を、保育者が身に付けていないことに気が付いた。また、園外の研修会などに出かけ、いろいろな知識や情報を得ても、園に戻って他の保育者と共有したり、実践へ反映することができない現実があった。

さらに、子どもの育ちと同じく、保育者の力量は、保育者自身が自分で調べ、考え、見つけていく過程によって力をつけていくものではないか、という思いに至った。そこで、自分たちが日々行っている幼児教育の素晴らしさや重要性を、さらに社会に広めるためには、まず、保育者が日々の保育で考えているテーマを持ち寄って、主体的に研究を行うための実践研究事業を呼びかけ、多くの参加者が集まった。同時に、私立幼稚園連盟の実践研究事業の主旨に同

意した広島大学附属幼年教育研究施設の教員と院生が、事業へ協力することとなり、そこから6年間の事業が継続している。

2. 連携実践研究事業の明暗

体制が整い、保育者が主体的に行う実践研究事業がスタートした。14園から集まった保育者たちは、「研究とは何か」という思いを抱きながら、大学の教員や院生からの異なる見解、具体的な研究方法、分析方法、まとめや提示の仕方などを学び、各々の研究に取り組んでいった。

ところが、これら共同研究の過程において、研究計画を立てたり、作業途中で躓いたりした際に、課題を調整して次の課題へ合意形成を図ったり、メンバーの相互理解を促す調整役割を、大学側の、特に大学院生が担う流れが生まれた。そのような状況下では、保育者が自分で自分の問題を模索する前に院生のアドバイスから解決方法を求めるようになったり、課題をまとめる具体的な作業をほぼ院生に託すことがみられるようになった。

他方、院生の研究の進め方に対し、「現場では実際はそうではない」という思いを上手く伝えられず、別の提案を発することができにくい雰囲気も生まれ、大学院生が研究の主導を握っていると感じる参加者も出てきた。

3. 今後の展望

保育者主体の実践研究を行うことを目的に、本来は、保育者側と大学側が、お互いに意味のある活動であったはずの実践研究事業におい

て、院生主導のスタイルが形成されたことから、保育者側に実践研究を進める上でのファシリテーターを育成する必要性が見出された。私自身もその役割について、今現在学んでいるところだが、これは園内の活動にも役立っており、今後広げていきたい点である。また、研究を通して、今までの自分を見つめ直し、自分たちの見ていたことを別の角度から捉えなおす目を養うことの重要性を理解した。研究の過程では、参加した人の内面や周りの世界が広がっていくことそのものに、研究の価値があると感じた。これを踏まえると事業をベースにして、園を超えた保育者同士のつながりが続いていることは大切である。

研究の成果にこだわるよりも、また成果の意味付けがよくわからなくても、自分自身の力で試行錯誤すること、考えること、そして、周囲と話し合うこと自体が、既に保育者の専門性を高めていることへつながっているのではないだろうか。研究に携わった保育者が、その事実気づけたことが、何より大切であろう。

【話題提供3】

保育者は、実践研究の何が難しく、何がつまらなく、何が面白いのか？

話題提供者：中坪史典（広島大学大学院）

1. 実践研究を支援する取り組み

幼年教育研究施設では、2008年4月から広島県私立幼稚園連盟と連携して、保育者の実践研究を支援する取り組みを行い、保育者の専門性

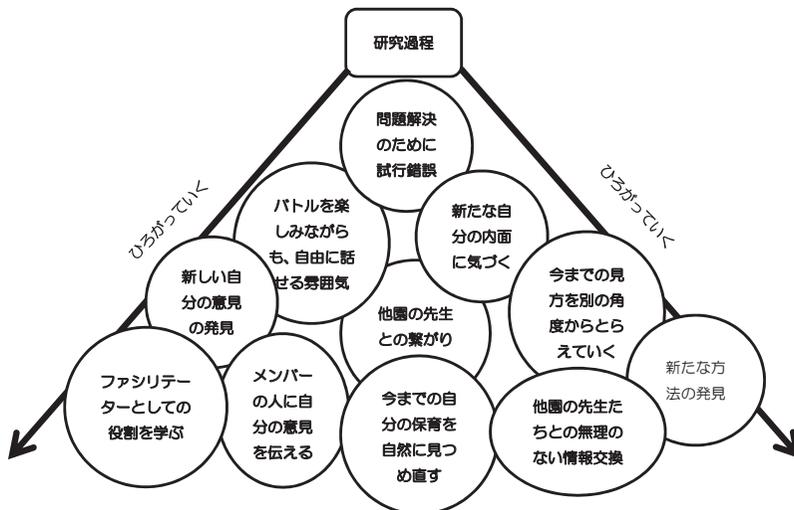


図1. 実践研究事業参加者の研究への展望

向上に寄与する大学研究者の役割について検討を行ってきた。実践研究は、広島県私立幼稚園連盟所属の幼稚園から任意で集まった保育歴3年以上の保育者が所属園を越えてグループを作り、ひとつの課題に共同で取り組んでいく形で行われる。各グループには、幼年教育研究施設の研究者および大学院生が加わり、保育者の実践研究を支援し、研究の成果は、中国地区私立幼稚園研修会で発表される。

私立幼稚園連盟との連携によって、保育者の実践研究を研究者が支援するという取り組みを行うに際し、私自身が拒絶したものがある。それは、a. 研究者の理論を当てはめるような研究、b. 研究者が保育者を指導するような支援、c. 大学院生の研究指導をするかのような支援、d. 保育者が研究者から回答を得るような学び、e. 広く浅い学び、f. 個人での学びである。そうではなく、私自身が目指したものは、a. 実践から問いを立てる研究、b. 大学院生を媒介に研究者と保育者が双方向にかかわる、c. 保育者に寄り添うような支援、d. 保育者が事例を収集し仮説を考えるような学び、e. 狭く深い学び、f. 協働での学びである。(図2参照)

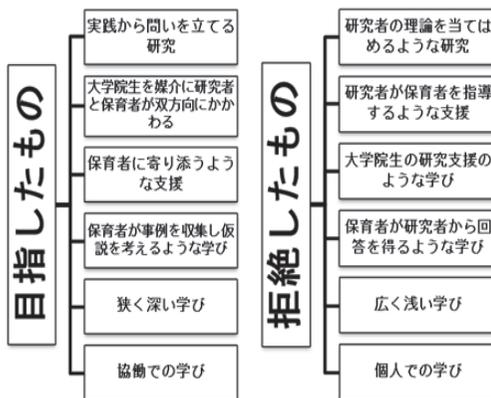


図2. 研究者が保育者の実践研究に拒絶したものと目指したもの

2. 保育者はこの取り組みをどう感じたか？

保育者と研究者が連携して実践研究を行い、研究者が保育者の研究を支援するという取り組みに対し、保育者への質問紙調査とインタビュー調査を行い、保育者はどのように感じたのか？という点について検討した。質問紙調査は、2011年8月に17名の協力者によって行い、回収率は70.8%だった。インタビュー調査は、2012年3月に3名の協力者によるフォーカス・

グループインタビューを行った。そして、これら調査をもとに、保育者が感じる実践研究の「難しさ」、「つまらなさ」、「面白さ」について分析を行ったところ、次のような結果が示された。

第一に、保育者が感じる実践研究の「難しさ」についてである。これは、保育をしながら研究をするという2つの状況を自分のなかで繋げられないために出てくるのではないかとと思われる。具体的には、保育のなかで、「研究テーマに沿った事例を集める」、「集めた事例を研究テーマと関連付けて仮説を立てる」という点に難しさを感じていることがわかった。また、「気づきや意見を言語化し、文章に表す」ことについても、難しさが示された。これは、保育者の専門性が、子どもの声なき声を感じ取り、言葉で表せられない感情をくみ取るような、非言語的な力による点が大きいのことが考えられた。

第二に、保育者が感じる実践研究の「つまらなさ」である。これは、保育者のなかに、実践研究に参加をすれば、日々の保育の悩みに対する具体的な解決方法が得られるのではないかと期待が存在している点と関係している。したがって、他園でも通じるような一般化された結果や、経験的に知っていることを改めて再認識するような結果になると、期待が外れて「つまらない」と感じる結果が示された。また、一瞬一瞬が二度と生まれることのない宝物のような、子どもをめぐる複合的なエピソードで形成された文脈のなかで日々保育を営んでいる「ホットな」保育者にとって、研究はその文脈とは決して切り離すことのできないものだと受け止められていることがわかった。そして、複雑な保育の出来事を実践研究にするためには、研究をいったん保育の文脈から切り離し、考えることを求める「クールな」研究者との連携によって、せめぎ合いが起きるのではないかとこの点が考えられた。

第三に、保育者が感じる実践研究の「面白さ」についてである。これは、例えば絵本製作のように、「すぐに保育実践へ還元できるような成果が得られること」、自分の保育を俯瞰できるような「子どもの見方や保育を捉える視点の変化を経験すること」、違う意見に触れたり、新しい研究方法など「他者との対話や共同作業を行えること」、劇化や製作など「趣向を凝らした研究発表を行うこと」に面白さを感じる結果が示された。

3. 無理なく楽しく継続的に進めるために

以上から、保育者との連携による実践研究事業を始めるに際し、研究者が目指したものと、保育者が感じた成果を対照させると、図3のような結果が見出された。

ここから、保育者が“無理なく、楽しく、継続的に”実践研究を進めるためには、次のような点が提言できる。まず、研究過程では、①保育の「悩みの解決」より「吟味・詳述」に焦点化する。②保育の一コマ一コマ、子どもの一挙手一投足をみんなで味わう。③子どもについて語り合う。④語り合いを促す有効なツールを用いる。などといった工夫をしていく必要があるだろう。

そして、研究の着地点については、⑤子どもの見方の「変化」を体験する。⑥保育を捉える「視点」の変化を体験する。⑦保育で漠然と感じていたことを裏付けられることで、理論と実践がつながる感覚を体験する。⑧保育であまり意識しなかったことへの気づきや新たな理解を体験する。以上の点を目標にしていくことが重要ではないだろうか。

【指定討論】

これからの保育実践研究：一つの提案

指定討論者：無藤 隆（白梅学園大学）

1. 研究者・実践者の関係のなかの研究の多様性 研究者と実践者の関係において、研究という

ものは多様な形態を示すが、大きく4つに分類されるだろう（図4参照）。一つ目は、実践者自身による研究である。これは、さらに、実践者による自分のための研究と、実践者による実践のコツを提供する研究に分けられる。二つ目は、実践者と研究者の共同研究である。本日のシンポジウムでは、この部分に大きく焦点が当てられている。三つ目は実践者と助言者という関係で行われる研究である。保育カンファレンスなどがこれに相当するだろう。四つ目は、実践志向の研究者の研究である。このように、実践と研究との関係は、「こうあるべき」一本の正しい道筋が存在するものというよりは、多種多様な関係性とそれに基づく研究の各々の形があって然るべきものであろう。

多種多様な実践と研究の関係を、研究の内容から検討すると、大きく2つの側面が見出せる。それは、「実践のある部分を詳しく見てみよう」とする動きと、「実践のある部分を変えてみよう」という動きである。このような2つの側面は、研究において、どちらも欠かすことのできない肝要な要素である。

前者は、「自分たちが日々行っていることを、改めて見直す」ために詳しく検討するものである。これによって、実践者はより実践を自覚的に見つめることができ、気づきを増していくことにつながる。後者は、「自分たちの保育を変えてみる、変えてみたい」という前提のもとで、「具体的に変えることができるか否か」、「変え

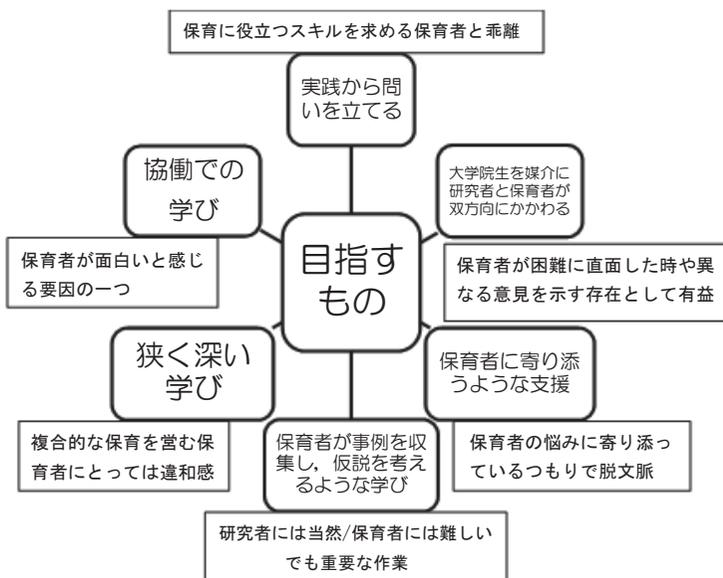


図3. 研究者の想定した保育者の実践研究と保育者が感じた実践研究

るためにはどのようなことが必要なのか], 「変えたら他の面はどうなるか」などを検討していくものである。これは、実践をよりよくするための変化を起こすことができる。

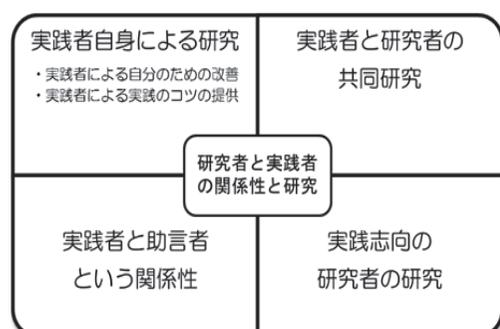


図4. 研究者と実践者の関係とそれに基づく研究

2. 「狭くて浅い」実践研究の重要性

私が最近行っている「狭く浅い」保育実践を変化させるやや極端な助言の事例を挙げると、「かわいい」の追放、人工音の追放、保育室における保育者の持ち物追放などがある。なかなか上手くは運ばないが、手始めに「やってみる」ことが大切である。また、保護者への保育のフィードバックについては、近年全国的な拡がりを見せているが、私はこれに関し、映像でのフィードバックを行うとよいと思う。これは、従来の写真のような静止画像ではなく、ビデオ記録のような動的な映像を園内で繰り返し流して、保護者に提供するという試みである。これら、従来の実践を変化させるスタイルによる実践研究の取り組みは、いずれも「狭くて浅い」ものである。その場その場で、非常に深い考察をしながら行うものでは、決してない。しかしながら、「狭く浅く」先ずは変えてみて、それをたくさん重ねていくという行為が、実は拡がりをみせるのである。

例えば、「かわいい」を追放する試みは、取り組みの手始めには、さほど労苦を伴わず着手することができるだろう。ところが、実際には「かわいい」がもつ「幼稚園らしさ」というものが存在しており、それが無くなった時に、その機能に気づき、代替するものを考え出すことが必要になってくる。つまり、これまで保育のなかで取るに足らないように思っていたものに、実は「隠された」機能があり、それが「幼稚園らしさ」を形成しているのである。これは、やってみないとわからないのものであろう。

3. 実践研究の共同体の形成

このように、アクションリサーチは、問題が極めて明確な場合に、具体的な改善点への手立てを示すために有効である。例えば、自園では、絵本に取り組んでいるが読み方を少し変えてみようとか、絵本コーナーを使いやすく変えてみようという方法である。ところが、園を良くしたい、そのために園で取り組んでいる絵本について、みんなで学ぼうというのは、少し意味合いの違う研究となってくる。そして、先にも述べたように、「保育の何かを変えてみる」という側面と、「保育をより詳述して見つめ直す」という側面の両方が必要である。

では、これら2つの側面を持つ研究を行うためには、何が求められるか。それは、実際に研究に携わる人間を育てるということである。具体的に言えば、ひとつは、実践的な思考を持つ研究者であり、他方では、研究的志向を持つ実践者の存在である。つまり、実践的研究者と研究的実践者の両者の育成が必要不可欠となる。そして、実践経験のある人が研究に進み、研究経験のある人が実践に入ることによって、これら両者が重なり合う状況が形成されるのである。このような、具体的な人の動きを全国的に広げていくことが必要であろう。また、実践と研究者の中間者という意味で現場の実践者が大学に入学して勉強する機会を設けると同時に、養成課程の大学教員をより実践を理解する研究者へ変えていくことが必要となってくるだろう。

4. 日本の実践研究スタイルとしての記述型実践研究

さて、先に述べたように、記述型の実践研究について考えてみたい。実践を詳しく記述して考えていく研究スタイルは、諸外国の実践研究と見比べても、日本に特徴的な形態であることが理解される。日本では、幼稚園のみならず、小学校や中学校の教員が質的に研究するという際に、自分たちの実践を振り返って記述し、それをもとにより良い実践を考える手法が伝統的に用いられてきた。この日本型記述スタイルの研究における流れを整理すると、次のようなものとなる(図5参照)。

5. 記述型実践研究で、どの言語を用いるか?

では、これら記述型実践研究は、どのような言葉を用いて記述されるものなのであろうか。これは、記述型実践研究の要である。研究者だ

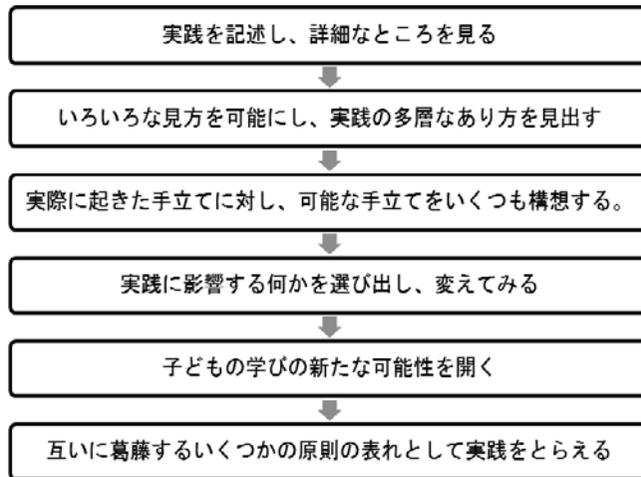


図5. 日本の記述型実践研究の流れ

けで行う研究であれば、用いる言語は研究者の言語でよいだろう。例えば、相互作用を分析する際に、「要求」や「反応」といった言葉を用いて記述することを意味する。ところが、実践研究の場合は、談話的共同体の一部として、保育のなかで使われる言葉を用いた記述がなされ、それを研究者が共有していくものとなる。保育の言語による記述には、保育特有の見方や概念が取り込まれている。例えば、「子どもたちの思いを大事にして」という記述は、研究者の言語で記せば「子どもたちの考えを活かして」と表現されるかもしれない。しかしながら、そこには同義にできないニュアンスが存在する。それが保育実践の固有さである。したがって、そのニュアンスを大事にしながらも、少しずつ学術的な表現を加えて、できるかぎり言語化するという作業が非常に重要となる。これにより、実践者の言語に学術的用語と概念を入れ込んでいく。そして、実践と研究の概念が混在・混淆

とした中に、将来の保育の改革が見えてくるのである。

6. 再詳述法による実践研究の吟味

このように実践的な用語が学術的な意味合いを含んで変わっていく。用語の変化は、単に言語の変化にとどまらず、見方や概念が変更されていくことにつながる。これを、私は再詳述法と呼んでいる。わかりやすく説明すれば、保育記述の見直し、つまり、用語の吟味によって、保育のなかに暗黙的に含まれている子どもの見方や実践の捉え方を考え直そうというものである。このためには、「狭く浅い」変更を重ねるとともに、他方で、実践の詳細な記述を行い、実践レベルで言葉の意味する概念を見直し、その検討過程で学術的な知見を持ち込むルートを形成していくのである。これを、今後の実践研究のあり方として提案したいと考える。